

宿泊体験学習における集団活動の基礎的研究 —山口県由宇青少年自然の家の実践を手がかりに—

和田剛志*

本研究では、宿泊体験学習における「個が生きる集団活動」を実践するため、集団の構造的な特性をとらえた「集団」というフレームの用途を精査し、躍動的な教育活動の前提となる「望ましい集団活動」について考究する。そして、集団の構造的な特性が手抜きをする個人を生み出すという仮説から、(1)個人の動機づけによる特性、(2)集団の規範による特性、(3)指導者の課題設定による特性という3つの視座をもとに集団活動を考察した。

〔キーワード：集団活動、構造的な特性、動機づけ、集団規範、相互関係性〕

1. はじめに—問題の所在と研究の目的—

日本の就業者の8割以上が、会社や官庁や教育機関など集団や組織の中で仕事をしているといわれている。なぜ、人間は集団で活動するのだろうか。その理由のひとつとして、「三人寄れば文殊の知恵」という諺があるように、一人ではできないことでも、集団で協力すればより優れた知恵が生まれるということが挙げられる。また、世界文化遺産の建造物や都会の超高層ビルを見れば、それを建設した集団の力を感じずにはいられない。ちなみに、東京スカイツリーの建設は総事業費650億円、建設に関わった人は58万人といわれている。このような事業は個人でできるものではなく、集団でこそ可能になるものである。このように、集団で活動することには大きなメリットがある。

筆者は山口県由宇青少年自然の家の専門員として、小学校や中学校など宿泊体験学習を指導し、支援させていただいている。当施設は、山口県岩国市由宇町銭壺山の山頂付近にある自然豊かな社会教育施設で、「山口県ふれあいパーク」として学校団体だけでなく、子ども会やスポーツ少年団、自治会、サークル団体、企業、家族など幅広く地域の方々に親しまれている。

学校団体に着目すると、宿泊体験学習や自然学校、林間学校など研修名は様々だが、研修目的の根幹として、非日常的な場における集団活動を通して、児童生徒の人間形成を育むというねらいがある。この集団活動を通して、本当に1+1=2又は3になるのかという場面に幾度となく遭遇し、「三人寄れば文殊の知恵」という諺に深く疑念を抱いた。例えば、研修プログラム「野外炊事」でカレーライスを作る際、自らの興味や関心事に没頭する非協力的な子ども、各班で問題を解きながら制限時間内に目的地を目指す研修プログラム「ウォークラリー」でのルールを逸した行動などを目の当たりにした。これ

は、指導者が意図的に葛藤する状況を作り出し、道徳的判断力や実践力を養うことを主なねらいとしたわけではなく、他の研修プログラムにおいても同様に、ある子どもは集団の向かう目的地とは違う場所へと行動を選択してしまうため、自分勝手だと非難される。その度に、引率教員が声を荒らげ、集団の連帯感や個人の自尊感情が低下し、悪循環に陥る。はたして、その集団や子どもの道徳的判断力や実践力の欠如だけが問題だ、と言い切れるだろうか。中国の故事に、「一人の和尚で水を担ぎ、二人なら水を持ち、三人なら運ばない」というものがある。これは、一人なら仕方がなく桶の水を担いでいき、二人なら協力して持つが、三人なら他人任せになってしまい誰も運ばないというもので、集団が大きくなるにつれて、そのような現象が生じることを表している。そもそも、個人は、自分の能力や力を集団の中でいつでも100%発揮できるだろうか。

この問題を分析したフランスの農業技術のリングルマン教授は、綱引きを8人で引く際に、1人の力を100%とした場合、集団作業時の1人当たりの力の量は、2人の場合93%、3人の場合85%、4人77%、5人70%、6人63%、7人56%、8人49%となった。つまり、8人で作業する場合、1人で作業するときと比べて、半分以下しか力を出していないのである。このような実験を通して、リングルマンは集団作業時には1人当たりのパフォーマンス(量的・質的生産性)が低下することを明らかにしたのである(リングルマン効果)。このように、釘原(2013)は個人が単独で作業を行った場合に比べて、集団で作業を行う場合のほうが1人当たりの努力量が低下する現象を「社会的手抜き」といい、投票率の低下や不正な生活保護費受給の増大、年金保険料の不払い、授業中の私語、国会での議員の居眠り、スポーツの八百長など、人間の様々な社会的行動についてまわる現象だと述べている。これは、教育現場だけでなく、職場や趣味集団での活動

* 山口県由宇青少年自然の家 専門員

など、人が社会で生きていく上で大きな問題となり、集団で活動することのデメリットとなりうると考えられる。

しかしながら、集団活動の中で意図的に不善をしているつもりはなくても、他の人と一緒に作業をしているだけで、無意識に手抜きをしてしまった経験はないだろうか。その原因として、釘原(2013)は、「自分が頑張っている、それが集団全体のパフォーマンス(量的・質的生産性)にあまり影響しないという道具性認知、他の人がしっかり仕事をしているので自分が頑張るの必要がないという努力の不要性、たとえ頑張ってもそれが他の人にはわからないので評価されないという評価可能性などがある」(pp.2-3)と述べ、集団活動における集団の構造的特性が手抜きをする個人を生み出しているのではないかと考える。このように、集団の構造的特性を無視した指導により、子どもに自立を強制していないだろうか。

文部科学省(2008)は『小学校学習指導要領解説特別活動編』で、特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」(p.8)ことであり、これらの教育目標を達成する前提として、「望ましい集団活動」の展開を強調している。また、文部科学省(2008)は『小学校学習指導要領解説特別活動編』で『「望ましい特別活動を通して」とは、一人一人の児童が互いのよさや可能性を認め、生かし、伸ばし合うことができるような実践的な方法によって集団活動を行ったり、望ましい集団を育成しながら個々の児童に育てたい資質や能力を育成したりする』(p.9)と示し、「個が生きる集団活動」(p.9)の方法原理について言及している。一方で、「集団」という枠組みにおける構造的特性をふまえた言及が希薄なため、「集団」が「個」に与える影響を十分に加味せず「個が生きる集団活動」(p.9)を説いている。つまり、「集団」というフレームの用途を誤ると、集団の中で「社会的手抜き」が生まれ、「個」のパフォーマンス(量的・質的生産性)は低下すると考える。

本研究では、「個が生きる集団活動」を実践するため、集団の構造的特性をとらえた「集団」というフレームの用途を精査し、躍動的な教育活動の前提となる「望ましい集団活動」について考究したい。そして、集団の構造的特性として、(1)個人の動機づけによる特性、(2)集団の規範による特性、(3)指導者の課題設定による特性という3つの視座をもとに集団活動を考察する。

2. 集団とは

2. 1. 集団の定義

「集団」といっても、家族、学級、職場、サークル、

会議、仲間、プロジェクトチーム、ボランティアグループなど、多種多様なものがあり、「集団」として一定の基準で内包することは難しい。狭義の定義として、『心理学辞典』(1981)は、「二人またはそれ以上の人々から構成され、それらの人々の間に相互作用やコミュニケーションがみられ、なんらかの規範が共有され地位や役割関係が成立し、外部との境界を設定して一体性を維持している人々から成る社会的ユニット」としている。この定義に従えば、集団を構成している成員非成員の境界や集団の目的も明確であり、成員間の相互作用の過程で役割分担が生まれ、構造化される。

また、広義の定義として、タジフェル(1981)は、「二人あるいはそれ以上の個人が自分を同じ社会的カテゴリーの成員であると知覚するとき、集団として認識する」としている。この場合、集団はカテゴリー化によって形成されるので、個人の認識レベルから自分が属している集団は主観的に認識されるものとなる。

さらに、ブラウン(2000)は、「集団とは、二人以上の人々によって構成され、それは共有された社会的アイデンティティを持ち、成員同士は他者によって認識されている」としている。この社会的アイデンティティとは、ある集団やあるカテゴリーに成員として所属しているという自己の関わりの認識である。

これらの多様な定義に共通している集団の要素は、集団を構成する成員が、二人あるいはそれ以上の複数人いて、その間に何らかの社会的相互作用による関係性があることが挙げられる。そして、この社会的相互作用は直接的な相互依存関係だけでなく、支社として離れた場所で働く企業組織集団における間接的な相互作用も含むと考えられる。つまり、社会関係性を大きな枠組みとしてとらえることで、より多様な集合体を集団として規定できるようになったが、同時に自分が属している集団を個人の認知レベルから主観的に認識することが考えられ、「集団」の定義の不明確さがより一層増したといっても過言ではない。

本研究では、このように多様な集団の概念を内包しているとされるフォーサイス(2006)の「社会関係性によって相互の関連を持ち合う二人あるいはそれ以上の個人の集合体」という定義を参考に、集団とは、「社会的相互作用を通して相互に影響を及ぼし合う二人あるいはそれ以上の個人の集合体である」と定義する。

2. 2. 集団の形成と発達

集団が形成され、集団も成員も変容していく過程を集団発達という。この成員間の持続的な相互作用を通して、相互依存関係が成立するとされる。その中で、成員間関係は役割分化がおきるとともに、集団内に規範が形成され、集団が構造化されていくと考えられる。

このような過程で、集団を構成する成員間で相互作用があり、それによって影響を受けた成員はさらに別の成員に影響を与える。アッシュ(1952)はこの集団の相互作用過程に着目し、集団を化合物としての水(H₂O)に例えた。水は二つの水素原子と一つの酸素原子が化合してできた一つの分子である。それぞれの原子は別の性質を持っているが、化合して水(H₂O)になることによって、さらに別の性質を持つことになる。集団も同様に、個人が影響し合うことで、単なる個人の合算ではなく集団全体が別の性質を持つことになる。つまり、集団とは、「相互に関係性を持つ個人の集合体」であるとすれば、集団現象は個人レベルに還元することで明らかになると考えられる。

3. 集団の構造的特性

集団活動において、集団のサイズが大きくなればなるほど、集団全体のアウトプット(現実の生産性)と個人のアウトプット(潜在的生産性)の合計の差が拡大し、集団のパフォーマンスが低下することは、先述したリングルマンが明らかにしている。リングルマンは、その主要因として、個人の動機づけの低下と成員間の調整困難性を挙げている。しかし、異なる課題においても、類似した要因によりパフォーマンスが低下するとは断定できない。このように、様々な側面から集団の構造的特性をとらえることにより、集団活動を再考する。

1 節では、心理的・生理的要因である「内的特性」と環境要因である「外的特性」から、集団活動における個人の動機づけについて考える。そして、2 節では、成員の相互関係性から、集団活動における集団の規範について考える。さらに、3 節では、課題の種類や特性から、集団活動における指導者の課題設定について考える。

3. 1. 個人の動機づけによる特性

成員個人の動機づけに影響を与える内的特性として、他者の存在による一定の「緊張感」が挙げられる。緊張感の低下が場合によっては動機づけの低下に結びつき、パフォーマンスの低下となって現れると考える。例えば、資料③C小学校での研修プログラム「集団行動」の中で、班ごとに児童全員の前で「休め、気をつけ、礼」の発表を何度も行った。「4) 児童の声」での集団行動に対する「厳しい訓練をさせてもらい、班で集団行動が上手にできるようになった。(5)」という記述から、ある一定の緊張感を伴う課題により動機づけが高まり、パフォーマンスが高まったと推察される。一方で、過度の緊張感や全く緊張感のない集団活動では、個人の動機づけの低下に結びつき、パフォーマンスが低下することは容易に想

像できる。

先述した釘原(2013)は、4つの外的特性を挙げている。まず、第1の外的特性として、道具性認知について述べている。集団活動において、個人の努力が集団に役立っているという道具性認知を高めることが必要である。その方法の一つとして、役割分化により個人の役割を明確にすることが挙げられる。すなわち個人が、集団活動のどの部分を担っていて、全体の目標達成にどの程度貢献できるかということをわかるようにすることが必要である。これをふまえて、研修プログラム「野外炊事」では、「班長、かまど係り、食器係り、食材係り」と予め役割分担をし、調理過程での自己の役割を果たすよう促している。

第2の外的特性として、努力の不要性が挙げられる。これは、他の人たちが自分より優秀であるために、自分の努力が集団全体の結果にほとんど影響しないが、それでも他の人たちと同等の報酬を得ることができれば、一生懸命活動する必要はないというフリーライダー(ただ乗り)を生み出しているとされる。場合によっては、自分の努力が他者の活動の邪魔をする可能性があることと認知させ、さらに動機づけを低下させる要因となりうる。

第3の外的特性として、評価可能性が挙げられる。これは、集団に対する個人の貢献度が自分自身だけでなく他者にもわかり評価される可能性のことであり、リングルマンの綱引き実験でも、個人の集団に対する貢献度はほとんどわからない。このように、集団活動における評価可能性が低ければ、明確に個人を評価できず、手抜きをする個人を生み出してしまふと考えられる。

第4の外的特性として、手抜きの同調が挙げられる。これは、他者があまり努力をしていなければ、自分だけ努力をしていることが馬鹿らしくなり、「正直者が馬鹿を見る」という現象である。つまり、集団の凝集性は高いが、パフォーマンスは低く、成員全員が怠けているような状態も考えられる。

このように、集団にはパフォーマンスに関する暗黙の規範が形成され、成員の行動を規定してしまうこともある。さらに、集団の中で手抜きをする個人が発生し、それが暗黙の集団規範となれば、その影響が長時間残ってしまうと考えられる。そのような状態になれば、集団を解体しない限り、修復させるのは困難である。

また、動機づけの低下を防ぐためには、目標設定だけでなく作業量提示方法も有効であると考えられる。綱引きや選挙において、個人の貢献度は終始ほとんどわからないため、動機づけを維持することは難しい。しかし、作業終了後だけでなく作業中にも効果的なフィードバックを行うことによって、動機づけを維持することができる。個人の手抜きが発生するのは、個人の努力の効果が

見えないことに由来する部分が大きいとされる。このように、努力の効果を可視化することにより、作業者の自己効力感が高まり、動機づけが維持されることも考えられる。

3. 2. 集団の規範による特性

集団全体が同じような考え方や行動をとるとき、その集団は内からも外からもまとまってみえる。シェリフ(1969)によれば、規範とは「社会的ユニットの成員として受容される行動と否認される行動の範囲を示す価値づけられたスケール」とされ、どの集団でも形成過程で一定の規範が存在するとされている。では、なぜ集団規範における一定の判断の枠組みが生まれるのだろうか。ここでは、個人的要因と集団的要因から集団の規範発生について考える。

まず、個人的要因として、フェスティンガー(1954)は、「人には、自己の判断、意見、態度などの確かさを求めようとする基本的欲求があり、この確かさを得るために、自分と同じ状況にある他者の判断を手がかりとする(主観的妥当性)」と述べ、「みんなが行っていることだから多分確かだろう」というように、他者の判断を拠り所にし、様々な規範が発生すると考えられる。

そして、集団的要因として、成員間で合意され共有された集団目標をもとに発生した規範が考えられる。また、集団独自の服装や言葉遣い、シンボルマークなどで象徴される集団らしさの形成と他集団との差異化が挙げられる。

このように、集団には許容範囲が広いものもあれば、強制力の強いものまで様々な規範がある。そのため、個人的要因としての曖昧な判断規準を示すものから、集団的要因として成員を方向付け、それに従うように働きかける強制力の強いものまでである。そして、それが集団の独自性となる集団らしさを育むことも確かである。

さらに、集団目標を明確に理解できない児童は、主観的妥当性によって集団の規範を構成し、いわゆる「自分勝手」な行いをしてしまう可能性があると考えられる。もしそうであれば、集団の規範との誤差を認知させるなど十分に改善の余地があり、指導者が声を荒らげる必要は全くない。

3. 3. 指導者の課題設定による特性

ここでは、集団の中で個人に手抜きを促す課題の種類や特徴を明確にするため、課題の性質について検討する。

スタイナー(1972)は、個人の貢献が集団全体の成果にどのように関係しているか、以下の5つに課題を分類した。

まず、加算的課題を挙げている。これは、綱引きやブレインストーミング、みんなで重いものを動かすといっ

た成員間で役割を分割することが不可能で、かつ生産量の最大化を要求される課題である。これは、リングルマン効果で示した課題と同じ類型であり、個人の手抜きを促進すると考えられる。

次に、補正的課題を挙げている。これは、スキーのジャンプや体操などの運動競技の採点に際して用いられ、ひとりひとりの判断や解答の平均をとり、それを集団の回答とする課題である。

そして、分離的課題を挙げている。これは、裁判や会議、チーム対抗戦など、全体で一つの結論を出すことが要求される課題である。この課題では、集団の中で最も優れた成員の能力いかんによって集団の成果が決定される可能性が高い。ただし、他の成員が、能力の高い成員の主張を理解できず、集団として最善の結論を導き出せないこともある。また、フリーライダーが生じることもあり、それが優秀な人の動機づけを低下させると考えられる。

また、統合的課題を挙げている。これは、集団での登山や護送船団など、集団の中で最も能力の低い成員いかんによって集団の成果が決まる課題である。そして、能力の低い成員を周りの者が助けることにより、集団全体の成果が高まる可能性があると考えられる。

最後に、任意的課題を挙げている。この課題は、先述した課題のように形式が決まっているものではなく、状況によって集団が課題形式を自由に選択できるものである。例えば、専門家の判断に従うこともあるなど、状況に応じて成員の役割や仕事の範囲、集団決定の方法を柔軟に変えるものである。

このように、スタイナーは、プロセスロスに焦点を当て、相互作用の過程で個々の潜在的資源を阻害する要因を明らかにし、集団での生産性の低下を阻止することを目指した。しかしながら、この相互作用はロスだけでなく集団の成果を高めることがある。つまり、潜在的に持つ個人の資質以上の成果となるプロセスゲインも現実には実在すると考えられる。

4. おわりに～研究のまとめと今後の課題～

本研究では、集団の構造的特性が手抜きをする個人を生み出すという仮説から、3つの視座をもとに集団活動を考察した。このように、集団活動は、個人のパフォーマンス(量的・質的生産性)を効果的に高めることができると同時に、個人のパフォーマンス(量的・質的生産性)を低下させ、集団に損失をもたらすという両価性を備えているといえる。つまり、集団の構造的特性を十分に咀嚼し、指導者が目的に沿った集団のサイズや規範、課題の設定、評価方法などを考慮した上で、集団活動を実施する必要があると考える。

そして、集団の中では、個人が手抜きをしていると非難されるように、われわれの社会には勤勉を奨励し、手抜きを抑えようという規範がある。しかし、場合によっては、その存在によって集団が維持されている可能性もある。例えば、集団の中で能力が劣っている他者との作業において、集団全体の作業成果として評価される場合、他者の不足分を補うべく努力する行動が生起することがある。しかし、この場合、個人の力の及ぶ範囲には限りがあり、集団のサイズが比較的小さいことが挙げられるが、無能な他者の存在は、周りの人の自尊心と動機づけの向上や維持に貢献している可能性も考えられる。この意味で、集団における個人の手抜きは単なる「なまけ」とは異なると推察できる。

さらに、個が生きる集団活動を実践するため、指導者はその理想や価値観を子どもに強制するのではなく、ある程度彼らのできることに合わせた集団へと導く必要があるのではないか。その過程において、成員間関係は役割分化がおきるとともに、集団規範が形成される。つまり、子どもの動機づけを高め、適した集団規範の形成を促す集団づくりと子ども観を十分に加味した課題の設定が望まれる。

また、宿泊体験学習における集団活動だけでなく、学校現場における学級経営やクラブ活動、趣味集団、職場といった様々な集団活動において応用可能である。そして、本研究では、リーダーシップとフォロワーシップを十分に取り上げることができなかつた。これは、リーダーがリーダーシップを発揮する中で集団は影響を受けるが、その集団活動は最も貢献している人物だけで成り立つものではないと筆者は考える。つまり、リーダーの影響度や集団成果を過度に評価する傾向があり、集団内でのフォロワーの影響の大きさを無視したリーダー論に疑念を抱いている。このような集団の構造化と形成過程における成員の相互関係性については、今後の課題としたい。

参考文献

1. Asch, S.E. :Social psychology, Prentice Hall, 1952
2. Brown, R. :Group process, Blackwell Publisher, 2000
3. Festinger, L. :Theory of social comparison processes, Human Relations, 7, 117-140, 1954
4. Forsyth:Group dynamics, Thompson Wadsworth, 2006
5. 藤永 保 :心理学辞典, 平凡社, 1981
6. 平木典子 :アサーション入門ー自分も相手も大切に自己表現法ー, 講談社現代新書, 2012

7. 本間道子 :集団行動の心理学ーダイナミックな社会関係のなかでー, サイエンス社, 2011
8. 片岡徳雄 :集団主義教育の批判, 黎明書房, 1975
9. 岸本 肇 :東日本大震災を教訓とする体育の防災教育論, 共栄大学研究論集 10, 205-218, 2012
10. Kravitz, Martin:Ringelmann discovered, Journal of Personality and Psychology, 50, 936-941, 1986
11. 釘原直樹 :人はなぜ集団になると怠けるのか「社会的手抜き」の心理学, 中公新書, 2013
12. 文部科学省 :小学校学習指導要領解説特別活動編, 東洋館出版社, 2008
13. 中竹竜二 :まとめる技術ーカリスマリーダー抜きで「勝つ組織」を作る方法ー, フォレスト出版, 2012
14. ネルケ無方 :日本人に「宗教」はいらない, ベスト新書, 2014
15. 岡本茂樹 :反省させると犯罪者になります, 新潮社, 2013
16. Sherif, M. , &Sherif, C.W. :Social psychology, Harpar&Row, 1969
17. 総務総務省統計局 :労働力調査長期時系列データ 2015
<http://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2013/index.htm>
18. Steiner, I.D. :Group process and productivity, Academic Press, 1972
19. Tajifel, H. :Human groups and social categories, Cambridge University Press, 1981
20. 東京スカイツリー Wikipedia HP, 2015
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

資料

筆者は、小学校・中学校・特別支援学校含む計 10 校の学校団体の宿泊体験学習を指導させていただいた。その中から、3校の研修を紹介する。そして、4)児童の声ーお礼の手紙よりーでは、研修後にお礼の手紙として送っていただいた児童の声を、各研修プログラムに分けて箇条書きした。この資料から何か明瞭な評価が得られるわけではない。しかしながら、研修を通して、児童が何を想い、何を考えたのだろうかを推察し、研修指導者として、次年度へ向けた貴重な振り返り資料としたい。さらに、御多忙にも関わらず、児童のために適切な振り返りを行い、お礼の手紙を送付していただいた先生方に改めて敬意を表するとともに、深く

感謝申し上げたい。

資料① 山口県柳井市立A小学校第5学年

1) 日時：2014年6月11日, 12日(泊2日)

2) 児童数：90名

3) 研修目的(めあて)

○時間：時間を守って(5分前集合)きびきび動こう。

○協力：わがままをおさえ、お互いを思いやって助け合おう。

○役割：考えて行動し、進んで自分の役割を果たそう。

4) 児童の声ーお礼の手紙よりー

(ウォークラリー)

- ・とても楽しかった。(4)
- ・少し辛かったけど、楽しかったです。
- ・印象に残った。(2)
- ・家族みんなでやりたい。
- ・今度は夏休みにチャレンジしたいです。
- ・危険な虫を教えてくれた。
- ・クイズを解くのがおもしろかった。(2)

(グループトレーニング)

- ・グループトレーニングで学んだことを学校で生かしたい。

(野外炊事)

- ・協力することの大切さを学んだ。(2)
- ・自分たちでカレーを作るのが印象的でした。
- ・印象に残った。
- ・美味しくできた。(3)
- ・分かりやすく教えていただいた。

(星空ウォッチング)

- ・天気が悪く星は見えなかったけど、星について知ることができた。
- ・星のクイズが楽しかった。

(陶芸)

- ・分かりやすく、コップの作り方を教えていただいた。(2)
- ・出来上がりが楽しみです。(2)

(研修を通して)

- ・食事が美味しかったです。(3)
- ・布団が気持ちよく、寝心地がよかった。
- ・また行きたい。(9)
- ・お世話になりました。(59)
- ・この体験を生かしたい。(13)
- ・「時間を守る」「協力し合う」「役割を果たす」のめあ

てが学べました。

- ・普段できないいろいろなことが体験でき、いい思い出になった。(13)
- ・充実した素敵な宿泊学習ができました。(2)
- ・協力することの大変さを学んだ。(4)
- ・宿泊学習のおかげで、学校生活で協力できるようになった。
- ・楽しく自然を学ぶことができました。
- ・成長することができた。(2)
- ・説明などが分かりやすかった。(4)
- ・いろいろなことを教えていただきました。(5)
- ・いろいろなことを準備していただいた。(2)
- ・辛かったけど、勉強になりました。

資料② 山口県柳井市立B小学校第5学年

1) 日時：2014年9月26日, 27日(泊2日)

2) 児童数：48名

3) 研修目的(めあて)

○規律：規則正しい生活態度に努め、集団行動の仕方や礼儀作法を身につけます。

○責任：考えたり工夫したりしながら、ねばり強くやりぬき、自分に与えられた仕事を責任もって最後まで行います。

○協力・友情：みんなで力を合わせ、友達や自分のよいところを見つけます。

○自然愛：自然のすばらしさを見つけるとともに、自然を大切にします。

4) 児童の声ーお礼の手紙よりー

(ウォークラリー)

- ・スリル満点で楽しかった。(4)
- ・道に迷ったりしたけど、班で協力してできました。(6)
- ・道に迷いそうになったけど、みんなが教えてくれたので嬉しかったです。
- ・とてもよい運動になった。(5)
- ・体力と協力を求められた。その中で心を1つにすることが難しかった。
- ・山頂での景色がとてもきれいでした。
- ・助け合い、協力することを学んだ。
- ・問題を解きながら歩くことが、楽しかった。

(野外炊事)

- ・協力することが大切だと思った。
- ・協力して楽しく作れた。(7)
- ・食器を洗うのは大変だったけど、そのおかげで班のみんなとの仲が深まった。
- ・みんなで作ったカレーは美味しかったです。(17)
- ・先生に褒められたので、嬉しかったです。
- ・食器点検がとても厳しかった。(5)

- ・食器点検でなかなか合格がもらえなかったけど、合格ができたときはすごく嬉しかった。達成感があった。(6)
- ・食器点検で厳しく指導をしてくださったおかげで、とても勉強になりました。(2)
- ・お世話になった気持ちを伝えるために一生懸命食器をきれいにした。
- ・簡単にわかりやすく説明していただいた。(7)
- ・まきやかまどを使ったので、昔の人の大変さがわかった。
- ・食器点検の時、ぼくたちの努力を認めてくださったことが嬉しかった。
- ・何度もやり直しをしたけど、その度に「また頑張ろう」と声をかけ合って何度も挑戦できた。
- ・料理係なのに、ピーラーや包丁が怖くて友達に任せていたけど、勇気を出してやってみたらすごく簡単にできたので、その時はすごく嬉しかったです。

(キャンドルサービス)

- ・スタンプではすごく緊張したが、楽しかった。(2)
- ・明かりがとてもきれいでした。(2)
- ・スタンプがうまく行ってよかった。
- ・班ごとのスタンプがとても楽しかった。

(焼き杉工作)

- ・先生に頼まれて、スポンジで掃除しました。そこはすごく綺麗になりました。
- ・すごく楽しかった。
- ・優しく教えていただいたので、よい作品ができました。(3)
- ・家の玄関に飾ってあります。

(研修を通して)

- ・お世話になりました。(28)
- ・仲間との助け合いや協力の大切さを学んだ。
- ・布団がふかふかで気持ちよかったです。(2)
- ・成長できた。(3)
- ・とても空気の良いところでした。
- ・初めは班長でもあるしとても緊張していたが、行ってみると景色も美しい建物もきれいで、ちょっとやる気が出ました。
- ・よい思い出になりました。充実した2日になりました。(4)
- ・2日間で1歩前へ進むことができた。
- ・また行きたいと思います。家族で行きたい。(5)
- ・来年の修学旅行が楽しみです。
- ・とてもよい体験ができました。ここでしかできない体験

- ができた。チャンスを与えていただいた。(8)
- ・学んだことを学校や家などで生かしたい。(8)
- ・宿泊学習のおかげで、いろんなことが頑張れるようになった。

資料③ 山口県岩国市立C小学校第5学年

1) 日時：2014年10月1日、2日(泊2日)

2) 児童数：70名

3) 研修目的(めあて)

- 礼儀：相手の目を見て黙って話を聞こう。自分から元気よくあいさつしよう。
- 思いやり：はき物をそろえよう。声をかけ合おう。助け合おう。
- 責任：きまりを守ろう。見通しをもとう。自分の役割に全力を尽くそう。
- 自立：最後まで一生懸命がんばろう。自分自身を成長させよう。

4) 児童の声ーお礼の手紙よりー

(集団行動)

- ・「休め、気を付け、礼」の3つの姿勢や方法を、分かりやすく教わった。(11)
- ・印象的だった。
- ・楽しく、厳しく教えてくださいました。感謝しています。(5)
- ・最初は揃わなかったけれど、〇がとれるように頑張った。
- ・みんなで音を合わせることで、成功した時の喜びなどを知った。(4)
- ・きちんと演技できるようになった。(4)
- ・思っている以上に辛かった。(2)
- ・いろいろな課題を乗り越えて、アドバイスをもらい合格できたので嬉しかったです。
- ・厳しい訓練をさせてもらい、班で集団行動が上手にできるようになった。(5)
- ・1日目は寒いし厳しかったので、あんまりやる気ありませんでした。2日目は1日目よりももっと厳しかったので、もっとやる気がなくなりました。何回やっても合格できなかったけど、何回かやって〇がつくと、その時すごく嬉しかったです。
- ・集団行動はただキビキビやるだけではだめで、みんなの心をひとつにすることが大切だとわかりました。
- ・声がかれてしまったけど、とてもすっきりしました。
- ・集団行動の大切さを知った。(3)
- ・はじめはあまり大きな声でなかったけど、いつもよりは大きな声が出て嬉しかったです。
- ・基礎の大切さや本当の喜びを知った。
- ・初めは全然できなかったけど、教えてくださったお

- かげで私たちは成長し、変わることができました。
- 学校でも続けていきたい。(6)
- 「厳しいよ」と聞いていたのでドキドキしていたが、とても楽しかった。
- 何度も繰り返す行いで、私たちを変えてくださっていると思った。
- 「気を付け」と「礼」が難しかったけど、班のみんなが教えてくれた。嬉しかった。
- 苦手なことをあきらめずに練習して、できるようになった。嬉しかった。(2)

(グループワーク)

- チーム力を高めることができた。これから必ず生かしていきたい。(3)

(野外炊事)

- かまどのつけ方がわかりやすかった。(2)
- カレーの作り方や食器の洗い方を学んだ。
- 大変だったので、美味しかった。印象に残った。(6)
- カレー作りや食器片づけを通して、協力することを学んだ。(6)
- 食器点検で何度もやり直しになったけど、あきらめずにみんなで協力してできた。(3)
- チーム力が高まった。(2)
- 食器点検時の合格の嬉しさは一生忘れません。(2)
- 煙で目や喉が痛かったけど、協力して助け合うことが大きくなって大切だということがわかりました。
- カレーが不味かったけど、みんな美味しいと言って食べていました。
- 班で協力することの大切さを知った。(2)
- お母さんの大変さがわかった。お手伝いを進んでいきたい。(2)
- 食器の点検はすごく厳しかったけど、私たちのためにやっていることだと分かり、すごく勉強になりました。(2)

(夜の集い)

- お母さんからの手紙ではちょっと感動しました。

(ウォークラリー)

- おもしろく写真をとってもらった。
- 問題を解きながら山を登るのが、大変でした。(2)
- 力を合わせることを学んだ。(2)
- みんなで協力できて、楽しかった。(9)
- 自然がよくわかり、良い経験になった。
- クイズ問題が難しかったけど、歩くのが楽しかった。(2)
- クイズをとくのが、楽しかった。

- 楽しい思い出になった。(3)
- 自然に触れ合うことができた。これからも自然を大切にしていきたい。

(研修を通して)

- 協力することの大切さを学んだ。(4)
- 成長することができたということを実感した。(8)
- この経験を活かして、いろんなことに挑戦していきたい。
- 強い心を持つことができた。(2)
- あきらめない心がもてた。(2)
- 人を思いやる心がもてた。
- いろんなことを体験できた。(2)
- 学んだことをいろんな場面で生かしていこうと思う。(7)
- また次の機会が楽しみです。(2)
- 指導を受けて変わることができた。(3)
- 優しく教えてくださり、感謝しています。
- 今まで思いやりがなかった自分を変えてくださった。
- この学年は先生に怒られたり、ひとつになることがなかったけど、この宿泊体験学習でひとつになることができた。
- ひとりではなく、みんなでやればできるということを学んだ。
- あいさつ・礼儀の大切さを教えていただきました。
- 厳しいこともあったけど、とても成長できました。変わることができました。(5)
- ふれあいパークに来る前とは別人のような心になりました。
- 団体のチーク力やみんなの絆ができました。
- とても楽しく学ぶことができました。(2)
- 帰るとき、雨が降っていたにもかかわらず、手を振っていただきありがとうございました。
- 教えてくださったことを学校生活に生かしていきたい。(9)
- 本当に感謝しています。(18)
- ふれあいパークがいろんな人に親しまれる場所になることを信じています。
- 宿泊学習での課題である「礼儀」「思いやり」「責任」「自律」「見つめよう」「感謝しよう」「変わろう」の7つを学校でやりたいと思います。
- 学校であんなに厳しく怒られたことがなかったので、厳しく怒られて変わった。
- 良い思い出になった。
- いろんなことに挑戦して、たくさん助けていただいた。
- 時間を守れるようになったし、正しい言葉遣いができるようになった。

- ・先生に言われてことを忘れずにもっと頑張りたい。
- ・また会ったときは元気な声であいさつします。
- ・良い思い出になった。
- ・いろんなことに挑戦して、たくさん助けていただいた。